

Title	現代大都市の理論的地平：世界都市化における〈空間〉の理論
Sub Title	The theoretical perspectives in contemporary metropolis
Author	有末, 賢(Arisue, Ken)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1994
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.67, No.3 (1994. 3) ,p.1- 24
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19940328-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

現代大都市の理論的地平

——世界都市化における〈空間〉の理論——

有
末
賢

- I 序——国際化・情報化と都市社会変動——
- II シカゴ学派の都市空間認識
 - 1 近代化・産業化と都市化
 - 2 「自然的地域」の生態学的秩序
 - 3 アーベニズムの「異質性」認識
 - 4 シカゴ・モノグラフの理論的地平
- III 新都市社会学の「関係としての空間」概念
 - 1 M・カステルの人間生態学批判
 - 2 資本主義化・国家による〈空間〉の再編
- IV 現代大都市の社会変動と〈空間〉の理論
 - 1 世界都市化のインパクト
 - 2 エスニシティの多元化と〈空間〉の変容
 - 3 情報化による〈空間〉の変容
 - 4 時間・空間のボーダーレス化と都市社会
- V 結語——媒介としての〈空間〉概念——

I 序——国際化・情報化と都市社会変動——

現代大都市の社会変動、特に国際化・情報化による「世界都市化」のインパクトは、都市社会学の理論的地平にとってどのような貢献をなしてきたのか。本稿は、この課題を解明していくために、〈空間〉の理論を導入しながら考察していきたい。近代における都市社会学の発展は、社会学説史の上でも、大きな変化をもたらした。いわゆる「古典的社会学」に属するコント、スペンサー、マルクスなどは、「都市」を自覚的な研究対象としては扱わなかった。また、「近代社会学」に属するデュルケーム、ヴェーバー、パレットなども「近代都市」そのものの社会学的研究はなさなかった。唯一、ジンメルだけが「大都市と心的生活」（一九〇三年）において、大都市人のパーソナリティを近代の社会変動、特に貨幣経済の発展との関連で考察している。⁽¹⁾ それに対して、パーク、バージェス、ワースなどの「シカゴ学派」の登場は、社会学説史上においても「実証主義」「社会調査法」「相互作用主義」など多くの貢献をなした。

しかし、その反面「シカゴ学派」の都市へのアプローチの仕方は、拡大していく「近代的」都市をそのまま研究の対象としていくために、都市の内部構造を追うことはできても、「近代」都市の外在的な存立条件を考察の対象とすることはなかった。すなわち「都市と国家」「都市と権力」「都市と階級」というテーマが「シカゴ学派」からは出てこなかったのである。一九七〇年代に入って、主にヨーロッパ諸国から登場したカステル、ハーヴェイ、パール、サンドース、ミンジョーネなどのいわゆる「新都市社会学」は、このような近代資本主義の発展と「都市社会学」とを正當に結び付けようとするマルクス、ヴェーバーの後継者をもって任じていたのである。したがってそれらは、新マルクス主義、新ヴェーバー主義という展開から後付けられている。⁽²⁾ ところで、一九八〇年代後半以降「世界都市化」や「ポードールレス社会」という現象のもとで起こっている「都市における空間の変容」とは、一体何を意味し

ているのであろうか。それは、都市社会が内部構造においても外部社会の変動を取り入れながら巧みに再編制されていく過程であると思われる。つまり、都市社会学は今まで見てきた「都市」という実態に対して、〈空間〉という正にポードレース的な概念を駆使しながら理論的に整理していかなければならぬ段階に至ってきたのである。

それでは国際化、情報化がどのような過程で現代大都市の理論的地平としての〈空間〉の理論を要請しているのであろうか。まず、国際化のインパクトは、ヒト、モノ、情報の三つのレベルにおいて「国境」を越えてそれらが流通していくことを指しているが、その際、重要な「中継基地」ないしは「媒介点」となっているのが「都市」である。もともと「近代国家」の形成途上においても、港湾都市、植民地都市などは、世界都市化の過程で登場してきたものである。そして、国際的労働力移動の時代を迎えている今日、大都市が「一国都市」から「世界都市」へと変貌していくことも当然である。しかし、都市がその国の「首都」としていわば「国民国家の文化」を代表していた時代には、資本主義文化それ自体もその国、地域の文化を反映したものになっていたのであるが、世界都市化の時代における資本主義文化は、多国籍企業などのように世界経済の同質化・同時化の要請に沿って再編制されてくる。そこで登場してくるのが、「都市空間の均質性」の要求である。例えば、「マクドナルド・ハンバーガー」というアメリカ合衆国に発したファースト・フードの店は、世界各地域の大都市に進出しているが、「都市空間」という観点から重要な点は、商品の味や中身ではなく、むしろ「ハンバーガー・ショップ」という店の空間やそこに入って行く「都市人」の様式の均質化、等質化の方である。⁽³⁾このようにグローバルゼーションは、一方で国民国家の文化を相対化し、人々の視野を広げていく効果もあるが、それと同時に時間・空間の均質化・同質化を推進していくことにもなる。それは、今までの都市社会学での比較都市論や都市社会構造論では扱い切れない概念としての〈空間〉概念の登場を要請しているのである。

同様に、情報化のインパクトを考察していく場合でも、従来の都市空間は微妙に変化してきていると言える。例え

ば、パソコン通信によるランダムな相手との交信可能な状態とは、機能的な意味においては、盛り場や広場に身をおくことと等価である。その意味では、現代人は自分の部屋の中に〈都市空間〉を内在化させたとも言える。そうなると、〈空間〉の理論から〈都市〉を読み解いていかなければ、都市の存在を前提とした都市社会学からは情報化・国際化のインパクトは理解できないのではないだろうか。⁽⁴⁾

以上、本稿での問題意識について国際化、情報化の影響が現代の都市社会変動にどのようにかわり、そして、都市社会学の理論的地平としての〈空間〉の理論にどのように結びついているのかについて概略見てきたが、理論的地平をより明確にしていくためには、やはり「シカゴ学派」、「新都市社会学」双方の〈空間〉認識、〈空間〉概念を後付けてみなければならない。そこで、まず、シカゴ学派の都市空間認識について次に見ていくことにしよう。

II シカゴ学派の都市空間認識

1 近代化・産業化と都市化

シカゴ学派の都市社会学は、「人間生態学」(human ecology)の名で知られている。これは、植物生態学、動物生態学などからの類比(アナロジー)としてR・E・パークとR・D・マッケンジーが名付けたものである。マッケンジーによると、「人間生態学にはまだその先蹤がないので、ここではひとまず人間生態学を、暫定的に、人間が環境の淘汰的、分布的、適応的諸力によって影響される空間的、時間的な関係として、定義づけることにしよう。人間生態学は、時間と空間における位置(Position)が人間の制度や行動に及ぼす影響に、基本的な関心を示している。⁽⁵⁾と述べられている。パークもまた、「社会は、空間的に別個に存在し、地域的に分布し、しかも各人が自分で移動することができる諸個人から成り立っている。⁽⁶⁾と述べている。

このようにシカゴ学派の人間生態学は、都市空間に「人が集まる」という現象から出発し、競争と淘汰の所産とし

て人間の空間的關係を描いている。このこと自体は、生態学として植物生態学や動物生態学との共通の基盤のうゑに存立していることを示しているのであるが、マッケンジーも指摘しているとおり、「人間のコミュニティは、移動性と目的という二つの主要な特性をもっているところに、植物のコミュニティとは異なっているのである。」⁷つまり、「各人が自分で移動することができる諸個人」を前提とするという意味において、優れて「近代的」かつ「市民社会的」な「社会」が前提とされているのである。シカゴ学派は、言うまでもなく移民国家としてのアメリカ合衆国の近代化・産業化とともに展開していった「社会学説」である。したがって、パークが「社会的実験室としての都市」(The City as Social Laboratory)という問題提起をしているのはこの意味でイギリスのチャールズ・ブース、ラウントリーなどによる社会事業、社会政策的な実践的研究テーマと同じ基本線上にのっていることになる。

そうであるならば、シカゴ学派が近代化・産業化の諸問題を「移動の自由」と「合目的集散」という二つの基本的な〈空間認識〉に収斂させていく必然性は一体何だったのだろうか。この点について次に「自然的地域」の生態学的秩序という観点から分析してみよう。

2 「自然的地域」の生態学的秩序

シカゴ学派の〈空間認識〉は、ある意味での科学的法則性を追究している。それが最も典型的に現れているのは、E・W・バージェスの「同心円地帯モデル」であろう。J・バーナードによれば、「生態学的パラダイムは、型相化された用途別の土地が様々な過程からの帰結であることを認識しながらも、先に述べたように市場過程を強調することを選択したのであった。かくして土地用途間の競争が地域社会の構造を説明する基礎的な生態学的過程となる。ひいては競争がこれらの諸機能を自然的ならびに文化的地域に凝離させる。……(中略)……時間の経過とともに同一空間において用途間の侵入が生じ、その結果土地利用の継起現象があらわれる。……(中略)……ともあれそれら一連の全

過程——競争、凝離、侵入、継起——は、自然界において動物区系と植物区系が相互に關係しているように、きわめて自然的な過程であるとみなされたのである。⁽⁸⁾ここに示されている〈空間認識〉は、「都市の発展」とは「自然的領域」(natural area)が本来もっている生態学的な秩序に帰する過程であるということになる。これは、言わば「生態学的パラダイム」が乗っているところの「資本主義パラダイム」ないしは「近代産業都市パラダイム」自体が、「規制を最小限にとどめた上での市場競争」という「神の見えざる手」を前提としていたからなのである。

その場合、シカゴ学派が見ようとした「都市空間」は、様々な社会病理、人種、エスニシティ、相互作用などを含みながらやはり最終的に生態学的な秩序を構成していくことになる。もちろん、シカゴ学派のコミュニティに対する見方は、L・ワースに代表されるように都市化に対して非常に「悲観的」である。都市的パーソナリティの心理的解体化、農村コミュニティの解体化などの指摘は、確かに「秩序に対するアノミー」を表現しているように考えられるが、ここで強調しておかなければならない点は、シカゴ学派におけるコミュニティ対ソサエティの二分法である。吉見俊哉は「空間の実践——都市社会学における空間概念の革新にむけて——」という論文において、〈空間〉概念と〈社会〉概念の分解として、「重要なことは、……(中略)……初期シカゴ学派の人間生態学にあつては、このような都市空間的な編成(コミュニティ)が、都市の社会的な編成(ソサエティ)を支えるものとして考えられていたことである。」と述べている。吉見は、シカゴ学派の人間生態学における空間概念を「自然としての空間」という一言で象徴しているが、ここで確認しておきたい点は、近代化・産業化にともなう都市化は、「社会の発展」そのものが空間認識を変えていくということである。「自然としての空間」は、近代が空間を創出していく過程自体を「不可視な物」にしてしまったとも言える。

それでは、ワースの提起した「アーバンイズム」からは都市社会学の理論的地平を考えていく場合、〈空間〉と〈社会〉の文脈に即して何を読み取るべきなのであろうか。その点を次に取り上げてみよう。

3 アーバニズムの「異質性」認識

ワースのアーバニズム論は、通常「都市」を独立変数とする都市効果論として理解されている。すなわち、「都市」とは、「相対的に規模が大きく、密度が高く、住民の社会的異質性の高い永続的な居住地である」と定義される。そして、「規模が大きければ大きいほど、また密度が高ければ高いほど、そして異質性が高ければ高いほど、それだけアーバニズムの特徴は促進される」というわけである。

人口の「規模」と「密度」との間に関連があることは明白である。これに対して、「異質性」には、人種―民族的な異質性も職業―階層的な異質性もあり、規模と密度が「社会的分化」を介して「異質性」に関係しているかもしれないが、「異質性」そのものは、「都市」だけによって規定されるものではない。したがって、後にC・S・フィッシャーによって「異質性」概念は批判され、彼自身の「下位文化理論」(Subcultural Theory of Urbanism)によって再解釈されていくことになる。⁽¹⁰⁾この点については、松本康の「都市はなにを生みだすか——アーバニズム理論の革新——」などにおいて詳しく論じられているが、⁽¹¹⁾ここでは、ワースが提起した「生活様式としてのアーバニズム」がシカゴ学派の「都市空間認識」の上でどのような意味をもっていたのかについて考えてみたい。確かに、ワース自身は、「都市」のもつ「異質性」の吟味において正確さを欠いていたし、人種―民族的な異質性と職業―階層的な異質性とを混同していた面もある。

しかし、〈空間認識〉の上での「異質性」とは一体何であろうか。生活様式においてワースが主張した都市―農村連続体説(urban-rural continuum)は、言い換えると「非空間的認識」である。その意味で、「都市」の性格は、一方で空間を越えていく性質があることを予感させてもいる。つまり「異質性」という認識は、フィッシャーが正確に読み取ったように、非通念的な下位文化の発生を可能なものにする。つまり、下位文化とは、外社会から相対的に区別された社会的ネットワークと、それに結びついた特徴的な価値・規範・態度などによって構成される社会的世界であ

る。したがって、都市は、下位文化の生成をとおして、文化的な異質性を増大させるのである。

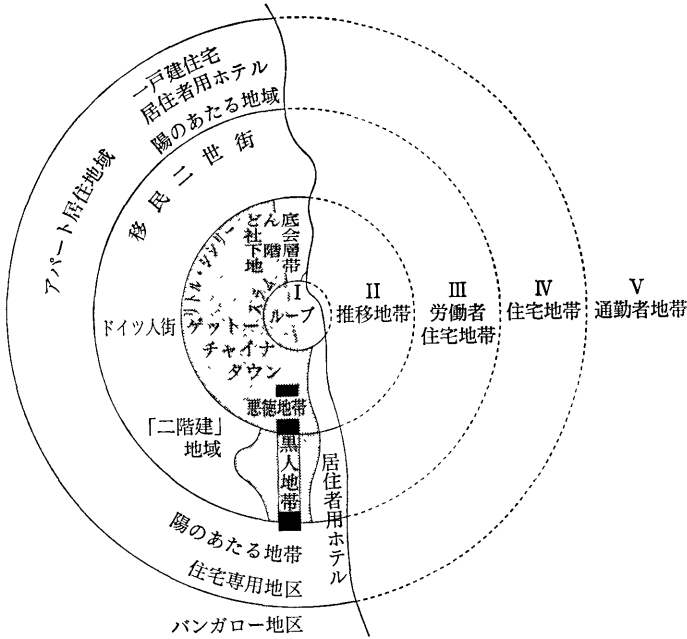
要するに、非通念的な下位文化や文化的異質性それ自体は、〈非空間的〉な概念であり、ワースの錯綜した議論の中での「分業の発達と大衆化」を意味しているが、そうした下位文化が都市という〈空間〉を占有したときに実は「都市的」という意味での「ハレ」の空間、すなわち「盛り場」を獲得したことになるのではないだろうか。シカゴ学派の都市社会学は、実証的なモノグラフ研究においてその特性を遺憾なく発揮しているように思われるが、それについてもう少し詳しくみていくことにしよう。

4 シカゴ・モノグラフの理論的地平

シカゴ学派の作品群は、先に述べてきたようなマッケンジー、バージェス、ワースなどのように理論化を志向しているものも含まれているが、シカゴ・モノグラフ・シリーズの名で知られている多くの実証的な作品が大半を占めている。例えば、N・アンダーソン『ホーボー——無宿者の社会学』（一九二三年）、F・M・スラッシュャー『ギャング——シカゴにおける一三—三人のギャングの研究』（一九二七年）、L・ワース『ゲッター』（一九二八年）、H・W・ゾーボー『ゴールド・コーストとスラム——シカゴのニア・ノース・サイドの社会学的研究』（一九二九年）、C・R・ショウ、H・W・ゾーボー、H・D・マッケイ、L・S・コットレル『非行地域』（一九二九年）、C・R・ショウ『ジャック・ローラー——非行少年自身による話』（一九三〇年）、P・G・クレツシー『タクシー・ダンスホール——商業的娯楽と都市生活の社会学的研究』（一九三二年）、E・H・サザラント『職業的窃盗』（一九三七年）、R・E・L・フェアリス、H・W・ダンハム『都市地域の精神障害』（一九三九年）などが挙げられる¹²⁾。

このようなシカゴ・モノグラフの一つ一つについてここで検討するわけにはいかないが、これらのモノグラフがシカゴ学派のどのような〈空間認識〉の上に築かれてきたものなのかについてだけ触れておきたい。例えば、『ギャング』

図1 都市生態学からみたシカゴのギャング街の位置



(一九二七年)の研究で名高いスラッシュャーは、都市生態学から見たシカゴのギャング街の位置を図1のように示している。⁽¹³⁾これは、パージエスが示した都市の発達の同心円理論の地帯図に重ねたもので、図の中の灰色の部分ギャングの町の中心的な縄張りに近い位置を表している。パージエスの同心円地帯理論でいうところの(II)推移地帯、(III)労働者住宅地帯にあたる地域に、ユダヤ人コミュニティとしての「ゲットー」や、イタリア人街としてのリトル・シシリー、そして中国人街としてのチャイナタウン、「黒人地帯」といった移民による「凝離」(分離: segregation)が見られる。また、興味深い点は、(III)労働者住宅地帯の湖畔の北側には、「移民二世街」という名称が見られ、住宅形態としては、「二階建」地域となっており、ドイツ人街もそこに見られる。

スラッシュャーの『ギャング』の中に出てくるこのようなエスニック・コミュニティの存在は、シカゴ学派の研究者にとって「スラム」、「非行や犯罪」、

局面を迎えてアジア、アフリカ、ヨーロッパ、ラテン・アメリカなど全世界的に「移民と都市化」の問題を抱えているのである。したがって、いかなる「世界都市」においても、レベルの相違はあるにしろ、スラッシュヤーが六〇年余「逸脱とコミュニティの解体」のシンボルとして扱われてきたように思われる。しかし、これは「移民と都市化」というアメリカ合衆国における近代都市生成の問題と深く関連しているものと考えられる。つまり、産業化を伴った都市化において、移民の都市内部地域への進出は、その職業構造と関係している。したがって、都心から近い工場地帯、及び商業地帯を目ざすわけである。エスニック・コミュニティは、彼らの家族・親族生活、労働や仕事に関する情報、文化・娯楽やコミュニケーション全体にとって欠かすことのできない集団であった。しかし、「移民二世」たちになると、一世とは異なったコミュニティも出てくるし、アメリカン・コミュニティへの同化も起こってくるのではないだろうか。もちろん、この問題については、人種・階級やアメリカの制度的な「移民排斥」及び「差別」との関係があり、エスニック・コミュニティ全体を一般化することはできない。

ここで注意しておきたい点は、シカゴ学派の〈空間認識〉が人種・民族・階級という「異質性」認識に基づいて行われているということである。これは、「移民と都市化」という特殊・アメリカ的な背景の中から出てきたものであるが、しかし、「異質性」を下位文化と置き換えたとしても、ここには「都市空間」の凝離（分離）や分化していく過程が示されている。したがって、シカゴ学派の〈空間認識〉は、単純に画一的、自然秩序的なものであるとは言いが切れない。しかしながらシカゴ学派が目指したものは、「モデル」としての空間的な秩序であったのではないだろうか。移民国家としてのアメリカ合衆国の「同化統合」モデルは、シカゴ都市社会学においても一貫していると言える。逆に言えば、アメリカ人、アメリカの都市社会（コミュニティ）としての「同一性」ないし「同化」が裏側で問題になっているからこそ、「異質性」が前面に出てきたのだとも言えよう。しかし、ある意味ではシカゴ・モノグラフの価値は、世界都市化の今日においても依然として有効な問題提起となっている。つまり、現在では国際的労働力移動の

り前にシカゴで行った調査と同様の状況が現前化しつつあるとも言えるのである。

現代大都市の国際化・情報化という都市社会変動へ話を進める前に、もう一つの都市社会学の理論である「新都市社会学」の〈空間概念〉について次に検討しておきたい。

III 新都市社会学の「関係としての空間」概念

1 M・カステルの人間生態学批判

一九七〇年代からイタリア、フランス、イギリス、スペイン、ハンガリーなどのヨーロッパ諸国から起こってきた「新都市社会学」の潮流は、現在さまざまな理論的、実証的反省期を迎えつつあるように思われる。M・カステルが著『都市問題』（一九七二年）のなかで、「(1)都市化という用語は、限定された空間での行動や人口の明確な集中を特徴とする人間社会の特定の空間形態の特性であり、また同時に特定の文化組織つまり都市文化の存在や拡散にもかかわっている。この混乱はイデオロギー的なものであり、つぎのことを目標としているからである。

(a) 生態的形態と文化内容を一致させること。

(b) 密集化と社会的異質性という〈自然的〉現象から社会的価値を生産するというイデオロギーを前提としていること。と述べているように、シカゴ学派の伝統的都市社会学に対して真っ向から批判している。そして、「社会の空間形態の社会的生産の過程はどんなものであるか。また別に、従属関係を特徴とする社会相互間の全体のなかで、構成された空間と社会の構造的変化との諸関係はどんなものであるか。」を『都市問題』の主要な理論的問題提起としてカステルは問うている。しかし、このような壮大な問い掛けに対するカステルの解答は、アルチュセールの構造主義的マルクス主義を基調とした「空間を社会構造の表現として分析することは、経済システム、政治システム、イデオロギーシステムの諸要素による、およびそれらの複合とそこから導き出される社会的実践による空間の形成を研究す

ることである。」ということになる。⁽¹⁷⁾

ここに見られる「空間」社会システムからなる「生産様式」の物質的な表現」という図式は、「経済構造を「下部構造」ととらえるマルクス主義の見解を越えていくものではない。それは、カステルが、「それゆえに、われわれは、都市的なものという観念が意味している多くの現実を労働力の集団的再生産（客観的に社会化された）によって置きかえることができ、また都市的単位やそれに関する諸過程を資本主義生産様式における労働力の集団的再生産の単位として分析することができるだろう。」⁽¹⁸⁾と述べていることから明らかである。確かに、「社会」によって規定され、「生産様式」によって再生産される「空間」という問題構制は、「新都市社会学」が伝統的なシカゴ学派の都市論に対して挑戦的に挑んだ「空間概念」であると言える。しかし、吉見も指摘しているとおり、「全体として彼が問うているのは、空間の社会性と社会の空間性の複雑な絡まりあいではなく、あくまで社会構造の空間への反映であり、その空間の中で生じる社会過程なのである。……(中略)……人間生態学が「空間」による「文化」の決定という前提に、文化生態学が「文化」による「空間」の決定という前提に立ったとするならば、カステルにあって「空間」は、社会、とりわけ「経済」と「政治」によって決定されるものとして理解されている。つまり、ここにおいても「空間」と「社会」の二分法それ自体がのりこえられているわけではなく、ただ説明変数についての把握の仕方が変わっただけなのである。」⁽¹⁹⁾という結論になるのである。

2 資本主義化及び国家による「空間」の再編

以上見てきたように、新都市社会学によるシカゴ学派の都市論に対する批判は、都市を単なる独立変数としてとらえるのではなく、都市は社会的闘争場(アリーナ)であって、資本・国家・権力・階級・社会運動などの政治・経済の従属変数としてとらえなければならないというものであった。この点は、前述したネオマルクス主義の立場に立つ

カステルとは異なって、ネオ・ヴェーバー主義から都市経営的テーマを追求したR・E・パウルも「都市社会学の根本的な間違いは、都市の理解のために都市を見たことだった。むしろ、都市は一つの闘争場(arena)として見られるべきものであり、都市を創り出している全体社会の理解を助けるような理解として見られるべきなのである。」⁽²⁰⁾と述べている。

確かに、吉見が適確に指摘したように、新都市社会学の〈空間〉と〈社会〉の関係はある意味で人間生態学やW・ファイアレイラの文化生態学と「相同的」(homologous)な形態を採っており、「関係としての空間概念」の限界も指摘できる。⁽²¹⁾しかし、一九七〇年代以降の先進資本主義諸国において顕在化してきた、都市空間に対する〈国家〉や〈資本〉の介入過程は、まさに〈社会〉による〈空間〉の再生産という現実をあらわにしてきた。例えば、インナーシティ問題や人種・少数民族問題に対して政府・自治体が政策的な介入をしてジェントリフィケーションや都心部の再開発計画を実施していくというような場合には、国家権力ないしは資本による〈空間〉の再編が行われているわけである。この場合、〈空間〉は〈社会〉との相互規定関係によって再編される。新都市社会学者の一人であるD・ハーヴェイの都市空間論を詳細に検討した岩永真治は、「デイヴィッド・ハーヴェイと現代都市——「差異」と「共通性」の内的弁証法を求めて——」のなかで、表1のように一九七三年以降の「フォードイズムからフレキシブルな蓄積へ」の転換を対照している。⁽²²⁾

つまり、ハーヴェイによると、「フレキシブルな蓄積」は、「フォードイズムの硬直性・一貫性(rigidities)」との直接的な対比によって特徴づけられるものである。岩永によると「ハーヴェイにオリジナルなのは、新しいシステムのほとんどすべてが資本蓄積を目的として動員されているという意味で「フレキシブルな蓄積」という言葉を用い、その新しいシステムの根幹に「時間と空間の経験」の変容があることをみさせている点である。古いシステムに対する新しいシステムの特徴を把握する際のキーワードは、「フレキシビリティ(柔軟性)」である。表1にあるように、それは

表1 フォーディズムからフレキシブルな蓄積へ

	フォーディズム	フレキシブルな蓄積
基本価値	硬直性・一貫性 (rigidities)	フレキシビリティ (flexibility)
時 期	1945～1973	1974～
労働過程 (1)	アッセンブリーライン 構想・実行の分離 財の生産	フレキシブルな労働 脱技能化と再技能化 サービスの生産
労働市場 (2)	完全雇用	労働市場の2極文化 (臨時雇用化)
国家政策 (3)	規 制 (福祉国家)	規制緩和 (民営化)
地理的移動性 (4)	ナショナルな社会・経済圏	グローバルかつローカルな 社会・経済圏
消費過程 (5)	財の消費から	流行の動員（大衆市場） サービスの消費へ
<文化形態>	モダニズム (1848/1910～ ……)	[ポストモダニズム] (時間-空間の圧縮 の新しいラウンド)
a. 時 間	“交替する時間” alternating time	a. 短命・はかなさephemerality (or volatility)
d. 空 間	冷淡に幾何学的 coldly geometrical 系統的 systematic	b. 分裂・微粉状態fragmentation (or pulverization)

(四つないし)五つの次元で把握されている。労働過程、労働市場、国家政策、地理的移動性のそれぞれの次元で「フレキシビリティ」が増大し、それにもなつて、消費の諸実践も急激に変化した。そして企業主義と新保守主義のリバイバルが、ポストモダンリズムへの文化的転回とむすびついた形でやってきたのである。ハーヴェイは、「戦後のフォーディズムは、たんなる大量生産のシステムというよりは、トータルな生活様式 (a total way of life) とみなされるべきである」と書いている。その相対が、一九七三年以降危機に陥つたのである。⁽²³⁾

ハーヴェイの論点から学ぶべき点は、おそらく全体的な生活様式としての「空間」概念ではないだろうか。「フレキシブルな蓄積」は、資本主義の世界において「時間―空間の圧縮」の新しいラウンドを伴ってきている。ハーヴェイによると、「時間―空間の圧縮とは、空間と時間の性質を根本から変えるために、我々が我々自身に対してする世界の表象の仕方を、ときにはまったくラディカルな方法で変えることを強いるような諸過程⁽²⁴⁾」とされている。この「時間―空間の圧縮」という考え方は、「空間」の社会性と「社会」の空間性を相互に規定している関係のうちに措置される。それでは、新都市社会学が提起した「関係としての空間概念」の理論的地平を経て、現代大都市の社会変動と「空間」の理論について次に検討してみたい。

IV 現代大都市の社会変動と「空間」の理論

1 世界都市化のインパクト

今まで見てきたように、シカゴ学派の「都市空間認識」は、近代化・産業化の影響の中からコミュニティ対ソサエティの二分法を駆使して生態学的秩序の抽出を第一義的なものとしてきた。それに対して、新都市社会学の提起した「関係としての空間」概念は、一九七〇年代以降の先進資本主義諸国における都市空間への国家・資本・権力などの介入過程を背景としながら、「社会」によって生産・再生産される「空間」という従属的側面を描き出した。このよ

うな都市社会学の学説・理論的動向から、今日の「世界都市化」における〈空間〉の理論について考察していきたい。まず、世界都市化の基本的条件として、(1)労働力の国際移動、(2)資本主義世界システムにおける中核的機能、(3)グローバル・レベルでの中心性と媒介性ということが挙げられる。都市化の理論の中では、都市(the city)のレベルを人口の規模にしたがって、「大都市」(大都市圏:Metropolis, Metropolitan Area)および大都市が機能・構造的に結びあつて、带状化した「巨帯都市」(Megapolis)、あるいはニューヨークなどの超大都市(Mega-city)というような名称が付けられていたが、J・フリードマンやS・サッセンらによって、一九八〇年代に入つて「世界都市」(World City, またはGlobal City)というカテゴリーが登場してきた。この「世界都市・仮説」はフリードマンによつては、「ある都市が、世界経済に統合されている形態や程度、新しい空間的分業のなかで割り当てられている機能は、都市内で発生するあらゆる構造的変動にとつて、決定的になるであろう。」と「世界都市は、国内・国外双方またはどちらかの大量の移民にとつての目的地である。」からなつて⁽²⁵⁾いる。

また、サッセンは資本主義世界経済の中心部諸国に位置する世界都市——とりわけそこにおける資本——の存立にとつて、周辺部諸国から流入する低賃金の労働者が切り離せないものとなつて⁽²⁶⁾いることを、アメリカの都市を事例に明らかにした。世界都市化のインパクトは、まず都市空間が人口の集積によつて創られていくだけでなく、世界経済や資本・労働力の国際移動によつても創り出されてくることを我々に示したのである。まさに、中心性と媒介性による〈空間〉の再編である。この点を次にエズニシティの多元化と情報化という二つの側面から〈空間変容〉の意味について考えてみよう。

2 エスニシティの多元化と〈空間〉の変容

現代大都市の社会変動の中でエスニシティを巡る議論は、さまざまな振幅を見せている。前述のサッセンの指摘どおり世界都市の存立は、周辺部諸国から流入する低賃金の労働者が切り離せないものとなっているが、このような「移民労働者」の流入はかつてのようなエスニック・マイノリティ(少数民族集団)の凝離(分離)と果たして直結しているだろうか。最近の「エスニシティの多元化」議論に見られるように、「移民」は必ずしもホスト社会の「中核的文化」に同化するものではなく、「適応―同化」が移民にとっての最終的な目標ではないという考え方が出されている。⁽²⁷⁾

特に米国における「コリアン・コミュニティ」(韓国系移民集団)を調査研究しているK・C・キムらは、以上のような「適応はするが必ずしも同化はしない」形態の「適応」類型を「適応の非ゼロサムモデル (non zero-sum model of assimilation)」と名付けている。つまり、「適応」のタイプが、「完全」な適応か「不適応」かに二分されるのではなく、「適応」それ自体の多様な展開を認めていこうというわけである。キムは、「適応の非ゼロサムモデル」の類型として、(1)同調的多元主義 (accommodative pluralism)、(2)抑制的文化変容 (controlled acculturation)、(3)同化なき文化変容 (acculturation without assimilation)、(4)多元的統合 (pluralistic integration) などを挙げている。⁽²⁸⁾

キムの指摘の重要な点は、このような様々な「適応類型」分析が、その「文化的適応」の側面と「社会的適応」の側面を区別しているということにある。キムらによれば、「文化変容」は「社会的同化」の必要条件ではあっても必ずしも充分条件ではない。特にそれは、最近の「非―白人系移民」に特徴的でさえあり、コリア系「移民」の場合は特にその専門職としての地位や英語会話能力、そしてプロテスタント教会への加入などの社会経済的行動や地位の高さが必ずしも「社会的同化」に結びつかない、と指摘している。

キムの指摘のもう一つの重要な点は、「適応の非ゼロサムモデル」における様々な特徴を民族的な特性に帰因さ

せるのではなく、ホスト社会の諸条件との「引き合い」において決定されるとらえている点である。しかもここでは、単純に「社会経済的な地位」が問題になるのではない。すなわち、ホスト社会の諸条件としては、政治的・法律的・諸制度の問題も重要であるが、とりわけ生活者個人の心理的・意識的な問題も重要になるのである。彼ら個人の「異質性認識」と、ホスト社会における「異質性認識」との引き合いにおいて、「適応形態」や「アイデンティティの再組織化」が決定されるのである。

このような「エスニシティの多元化」状況における〈空間〉の変容とは、すなわち「凝離」(segregation)よりは「共棲」(symbiosis)に近い形態になるのではないだろうか。そして、文化的にも複合文化、多文化的な都市空間が創出されてくるのではないかと考えられる。

3 情報化による〈空間〉の変容

世界都市は情報の価値においても、中心的及び媒介的な機能を担っている。情報化、あるいは高度情報化は〈都市空間〉をどのように変容させるのであろうか。従来は、ハード面でのME革命(マイクロ・エレクトロニクス革命)、OA化(オフィス・オートメーション)など技術革新を中心とした都心部中枢管理機能の高度化について多くが語られていたが、情報化の側面は、このような一極集中化だけをもたらしていくわけではない。東京圏を中心とした業務核都市の構想は、情報化による「多極分散型国土」の形成を意図したものである。サテライト・オフィス(衛星型の業務地域)や在宅勤務の発想なども、パソコン、ファックス、テレビ会議などの情報機器を前提としたものである。

近代の都市空間は、郊外化(suburbanization)をその大きな特徴としている。日本においては、一九二〇年代位から東京、大阪などの大都市を中心として始まった郊外化は、いわゆる「都市的な生活様式」というライフスタイルを定着させてきた。それは、職・住分離を第一の特性としており、そこから核家族化、労働と余暇の分離、通勤と郊外電

車の発達、盛り場を中心とした「都市大衆文化」（娯楽）の発生、消費生活の発達（家庭電化製品を初めとした耐久消費財の普及、マス・コミュニケーションの発達など一連の「大衆社会」の出現と深く関連しているのである。²⁹⁾

しかし、一九八〇年代に入ってからの世界都市化の中の情報化は、このような郊外的生活様式に対して一定の容を迫っているように思われる。それは、ハーヴェイの主張する「ポスト・フォードイズム」としての「フレキシブルな蓄積」にも関連するが、「時間―空間の圧縮」ということである。超高層ビルや地下街の発展、果てしない市街地化など、一方では都市空間は極限的な拡大過程を進めているように見えるが、しかし情報化の進展によって、個人の住居空間、一室、あるいはデスク・スペースのなかに一種の「都市空間」と呼べるような空間が確保され、細分化、極小化の方向へも変容しているのである。

以上のように、国際化・情報化が都市社会変動に及ぼした影響は、総合的にはいわゆる「ボーダーレス化」として考察することができるものと考えられる。

4 時間・空間のボーダーレス化と都市社会

時間規定や空間規定の根幹には、我々の「社会」の側での価値・規範が作用している。「近代社会」には「近代」特有の時間意識や空間意識が働いていた。そうであるならば、現在の「ボーダーレス」（境界喪失）状態は、「近代」という「境界」そのものが曖昧化していることの現れであるのかもしれない。時間規定の「ボーダーレス化」は、すでに農村の生活リズムと異なった都市の生活リズムが刻まれたときから現象化している。農耕の年中行事や通過儀礼が都市では意味をもたなくなり、労働と休日、曜日の感覚が次第に定着してきた。しかし、消費生活においても、通信・メディアの面においても、二四時間化が進行してくると時間規定を設けるのは、「社会」の側ではなく「個人」の選択に任されてくるのである。したがってこの意味でも、「ボーダーレス化」は多元化につながっていると見える。

つまり、極端に言えば、都市生活においては、いつ働き、いつ食事をとり、いつ睡眠をとるかは個人の選択に任ざられていく傾向が強くなっているのである。近代社会においては、「都市的生活様式」という外枠はかなり強固なものであったが、ポスト・モダンの社会においては、個人の「選択」・「多元化」がキーワードとなってくる。

空間規定についても同様のことが言える。東京圏を例にして言えば、空間規定のボーダーレス化は、一方で「外縁部の極限的拡大」と他方での「都心部・インナーシティエリアでの空洞化」の二重の都市社会変動から構成されている。つまり、「東京」の範囲が外縁部に益々広がって行くのと同時に、その「東京」の真ん中が空洞化していき、「東京」そのものの境界が喪失している状態である。世界都市化の中の現代大都市は、少なからずボーダーレス化の状態におかれている。そうした現実を踏まえた上で、都市社会学は新たな〈空間〉の理論を模索すべき時代にさしかかっている。時間・空間の伸縮性や「生きられる時間・生きられる空間」という現象学的な概念についても今後、考察していかなければならないものと思われる。

V 結語——媒介としての〈空間〉概念——

現代大都市の理論的地平は、従来からの伝統的な都市社会学に見られる「自然としての空間」、「文化としての空間」から「関係としての空間」、「媒介としての空間」へと概念装置の変換を要求してきた。吉見の「空間の実践」においても、「都市社会学的な観点からするならば、問題は、このように本質的に実践の媒体として、つまり〈位置づけ〉意味づけられる（意味づけ—位置づけられる）場として規定される空間が、現代の資本制社会においてどのような姿であらわれ、社会的に編成され、社会を組織しているのか、という点である。」と述べられている。³⁰⁾

ここで、「〈位置づけ—意味づけられる〉ないしは〈意味づけ—位置づけられる〉空間」という指摘は非常に重要である。これを筆者なりに解釈すると「ゲシュタルト (Gestalt)」としての〈空間〉概念ということではないだろうか。

「ゲシュタルト」とは「形態」を意味するドイツ語であるが、二〇世紀初頭に生まれた心理学の一つとして世に広まっている。それは諸要素の単なる総和ではなく、還元できない独自の法則によって諸要素を規定する、構造化された全体のことをさしている。⁽³¹⁾ゲシュタルト心理学でよく例に出される「ルビンの盃」あるいは「あひる―兎」の図を思い浮かべてみるとわかるように、視点によって「盃」にも「向かい合う人顔」にもなり得る。つまり、〈図〉と〈地〉の「反転」によって二義性を示すことになるのである。これは、〈空間〉に描かれた様式（あるいは紋様）は、〈位置づけられ―意味づけられる〉と同時に〈意味づけられ―位置づけられる〉わけである。どちらを〈図〉に見るか、どちらを〈地〉に見るかは、個人的「選択」に委ねられている。しかし、現代大都市の〈空間〉の生産・再生産は、資本・国家・権力などの諸要因を無視することはできない。したがって、二義的、あるいは多義的な〈空間〉を〈社会〉と〈個人〉をつなぐ「媒介」として見ていかなければならぬだろう。

本稿においては、世界都市化における〈空間〉の理論について都市社会学内部の理論的動向を中心として追ってきたが、残された課題として次の二点を提起しておきたい。まず第一に、〈空間〉の理論を考察していく際に意味論的な把握が必要になってくるが、認知心理学や構造人類学からの理論的示唆と共に、シンボリック相互作用論、現象学的社会学などがどのように貢献できるのかについても見ていかなければならない。マクロ理論としての「世界システム論」や「構造的マルクス主義」だけではなく、ミクロ理論として都市社会における人々の相互作用や「生きられる空間」についても考察しなければならぬ。⁽³²⁾第二には、現実の都市社会変動において、〈空間〉の意味変換がどのような形で行われているのかについても残された課題となる。都心部における「再開発」、インテリジェント・ビルの空間利用形態、情報化によるサテライト・オフィスや在宅勤務の形態など〈空間〉の変容が我々のライフスタイルに及ぼす影響についても考慮していかなければならない。例えば、職―住分離の極限的状态に対して「東京圏」はどのような解答を出すだろうか。「多極分散型国土の建設」という第四次全国総合開発計画（四全総…一九八七年）⁽³³⁾の

目標では具体的な〈空間〉像はまだ浮かんでこない。「遷都」や「分散型首都」などの提言も含めて今後考えていかなければならない問題である。

- (1) Simmel, G. *Die Grossstadt und das Geistesleben* "Die Grossstadt, herausg. von Th. Petermann, Dresden, 1903 (松本道晴訳「大都市と心的生活」鈴木広訳編『都市化の社会学〔増補〕』所収、誠信書房一九六五年)
- (2) Martin Staterly, *Urban Sociology Causeway Books* 1985. p. 31.
- (3) ジョン・トムリンソンは、「文化帝国主義」について語る四つの方法として、①「メディア帝国主義」としての文化帝国主義、②国家の言説としての文化帝国主義、③グローバルな資本主義に対する批判としての文化帝国主義、④近代性批判としての文化帝国主義を挙げて詳細に検討している。John Tomlinson, *Cultural Imperialism: A Critical Introduction*, London: Pinter Publishers, 1991 (片岡信訳「文化帝国主義」青土社、一九九三年) 参照。
- (4) 倉沢進・町村敬志編『都市社会学のフロンティア1 構造・空間・方法』日本評論社、一九九二年、吉原直樹編著『都市の思想——空間論の再構成にむけて——』青木書店、一九九三年など最近相次いで「空間論」についての都市社会学の専門書が刊行されている。
- (5) Robert E. Park, Ernest W. Burgess & Roderick D. McKenzie, *The City The University of Chicago*, 1925 (大道安次郎・倉田和四生共訳『都市：人間生態学とロケットシティ論』鹿島出版会、一九七二年所収 R・D・マッケンジー「ピートマン・ロケットシティ研究への生態学的接近」p. 65)
- (6) 同書、p. 65.
- (7) 同書、p. 66.
- (8) Jessie Bernard, *The Sociology of Community*, Scott, Foresman and Company, Illinois, 1973 (正岡寛司監訳「コミュニティ論批判」早稲田大学出版部、一九七八年、p. 49-50)
- (9) 吉見俊哉「空間の実践——都市社会学における空間概念の革新にむけて——」倉沢進・町村敬志編『前掲書所収』p. 116.
- (10) Fischer, Claude S., *Toward a Subcultural Theory of Urbanism*, A. J. S. 1975, 80: 1319-1341 (奥田道大・広田康生訳「アーバンニズムの低位文化理論にむけて」『都市の理論のために』多賀出版、一九八三年)
- (11) 松本康「都市は何を生みだすか——アーバンニズム理論の革新——」森岡清志・松本康編『都市社会学のフロンティア2 生活・関係・文化』所収、日本評論社一九九二年 p. 33-68

- (12) これらの中では、L・ワース(今野敏彦訳)『ゲッター…ユダヤ人と疎外社会』マルジュ社、一九八一年ぐらいしか翻訳されている。なお、G・イーストホープ(川合隆男・霜野寿亮監訳)『社会調査方法史』慶應通信、一九八二年の「第3章 踏査法」(p.54-103)も参照。
- (13) 秋元律郎『都市社会学の源流——シカゴ・ソシオロジーの復権——』有斐閣、一九八九年より引用。原図は、F. M. Thrasher, *The Gang: A Study of 1,313 Gangs in Chicago*, 1927, p. 24.
- (14) この点については、有末賢『移民研究と生活史研究——日系人・日系社会研究の方法論的課題——』柳田利夫編『アメリカにおける日系人——都市・社会・生活——』同文館所収一九九四年(未刊)を参照。
- (15) Manuel Castells, *La Question Urbaine*, Maspero, Paris, 1977 (山田操訳)『都市問題——科学的理論と分析——』恒星社厚生閣、一九八四年、p.11.
- (16) 同書、p.13.
- (17) 吉見俊哉『空間の実践』前掲、p.130.
- (18) M・カステル(山田操訳)『都市問題』前掲、p.396.
- (19) 吉見俊哉『空間の実践』前掲、p.130-1.
- (20) Pahl, R. E., *Whose City? Penguin*, Harmondsworth, 1970, p. 234-5.
- (21) 吉見俊哉『空間の実践』前掲、p.130. Peter Saunders, *Social Theory and the Urban Question*, Hutchinson 1981 2nd edition (一九八六年)も参照。
- (22) 岩永真治『ディヴィッド・ハーヴェイと現代都市』吉原直樹編著『都市の思想』前掲、所収、p.261より引用。なお、岩永真治『アフター・フォーディズム時代の空間的諸形態——「情報型発展様式」のインパクト——』『哲学』(三田哲学会)第三九三集、一九九二年一月、p.249-278も参照。
- (23) 岩永真治『ディヴィッド・ハーヴェイと現代都市』前掲、p.258-9.
- (24) 同書、p.260また、アンソニー・ギデンズ(友枝俊雄・今田高俊・森重雄訳)『社会理論の最前線』ハーベスト社、一九八九年、p.223「時間—空間関係」も参照。
- (25) 町村敬志「世界都市化」する東京——構造転換のメカニズム——』倉沢進・町村敬志編『都市社会学のフロンティア1 講造・空間・方法』前掲、p.9-10, Friedmann, J. *The World City Hypothesis, Development and Change*, 17-1 (1986) 69-84.

- (26) Sassen, S. *The Mobility of Labor and Capital*, Cambridge: Cambridge University Press, 1988.
- (27) 広田康生「エスニック・コミュニティ(移民コミュニティ)研究の視点と方法——「都市と異質性」のテーマ再考を目指して——」『専修大学社会科学研究所月報』No. 359, 一九九三年五月号、参照。
- (28) Kim, K. C. and Hurh, W. M., *Adhesive Sociocultural Adaptation of Korean Immigrants in the U. S.: An Alternative Strategy of Minority Adaptation*. "International Migration Review" vol. 18, 1984.
- (29) 平井正・保坂一夫・川本三郎・山田孝延・伊藤俊治「都市大衆文化の成立：現代文化の原型一九二〇年代」有斐閣選書、一九八三年参照。
- (30) 吉見俊哉「空間の実践」前掲、p. 136-7.
- (31) 見田宗介・栗原彬・田中義久編『社会学事典』弘文堂、一九八八年所収の「ゲシュタルト心理学」の項目による。なお、有末賢「東京圏の〈地〉と〈図〉」『三田評論』第九五五号「研究余滴」、一九九四年二月も参照。
- (32) 有末賢「都市社会と意味の重層性——都市における構造と意味——」地域社会学会編『地域社会学会年報第五集 都市・農村の新局面』所収、時潮社、一九九一年五月、p. 59-89.
- (33) 高橋潤二郎編『四全総は日本を変えるか』大明堂、一九八八年参照。

【追記】 本稿は、平成五年度慶應義塾学事振興資金による研究補助(各個研究A)の成果の一部である。